

## 第一義の問題

人生とは

「人生とは」と問はれたら、私は何時も「教化である。」と答へて来た。

動物の集団と人間の社会との相違は、かかつて教化の有無にあるが故に、教化のない社会が動物本能のまる出しや、悪逆の罪業そのままであることは当然のことである。

真実の教化がない世界では、人は必ず悪い教育を受ける。人生に動物の世界よりもつと悪い一面を持つのはそのためである。尊い人、智慧のある人、道の人は必ず正しい教育から生れた。であるから聖人が教えを何よりも問題とせられ、教えを虚偽と権化と真実との三つに分けられたことは、まことに当然のことである。

人生に於いて真剣に生きることを考えたほどのお方は、みな、身を以つて、衷心の願いとして、教えを求め、教えを聞き、全我を挙げ、一生を貫いて教えに生ききられた方であつた。

生まれた日のある我らは死なねばならない日がある。何時それが来るかしれない。それを思う時、厳肅な声として如来聖人の教えがせまつて来る。もとより我らは微粒大の存在ではあるが、たった一つみ教えに生きさせて頂くというだけは許されている。有り難いことである。

### 妻子の勸化

「わが妻子ほど不便なることなし、それを勸化せぬは浅間しき事なり、宿善なくば力なし。我が身を一つ勸化せぬ者があるべきか。」（御一代聞書）

「わが妻子ほど不憫なることなし」わが妻子ほど我に近いものはなく、可愛いものは外にない。その一番不憫なる妻子を「それを勸化せぬはあさましき事なり。」まことにお言葉通りである。世間の人を教化し、勸化するかに見える人が、自分の妻子を勸化せぬならば、そこには必ず、その人の胸中に何か清算されぬものが残っているであろう。

しかし如何に勸化しようとしても、泥に灸きゅうをすえるが如く、教えに対して感ずる心が少しもなく、聞こうとする願いがおこつて来ない「無宿善の機」は、如何とも出来ない。そこで「宿善なくば力なし」と言われるのである。

世には無宿善の家内を持つて泣いている人がある。しかし、自らは道に生ききりつつ、しかも、家族に道ならぬ悪人を持つ人であるならば、家内を勸化せられないことによつて少しもその徳を滅ぼすことなく、その人自身の光がいよく輝くであろう。その人は妻子に対して無関心であるのではなく、そこには悲痛な願が動いているが故である。

しかしながら、妻子を勸化する以前に、「我が身を一つ勸化せぬ者があるべきや。」まことに至言といふべきである。有り難い手厳しいみ教えである。我が身を勸化せぬものは、我を真実の人生の外に隔離するものである。

我が身を一つ

社会を問題とし、他人を問題にし、人を教え、人を導く前に、我が身一つが果して導かれているであろうか、教えられているであろうか。すべてが問題となったその最後に、自分だけが残されていないであろうか。妻子を教え導き、これを直そうとする人はあつても、自らを勸化する人は少いであろう。厳肅に自らの問題を問題とし、消すことの出来ない衷心の願いを願ひとしてのみ、そこに宗教がある。

自分自身をどうするか。解決のついていない自分、救われていない自分、生死の巖頭に立てる自分、見れば見るだけ愚悪である自分、その全体としての自分をどうすればいいか。こうした問題、即ち第一義の問題に対して、根本的な答がほしい。これが即ち生死の問題であり、いわゆる後生の問題と言われるものである。

「我が身を一つ勸化」するとは、この第一義の問題に対して、真実の解決を得ることである。しかしてかかる第一義の問題に対して、真の解決を与えて下さるものは、真実の教えである。真実の教えを領解した相は信心である。であるから「我が身一つを勸化する」とは、信心獲得することである。蓮如上人が御一代の間「信をとれ」と叫ばれたのもこの所以である。

悲しきは

信心獲得の世界は、人がその一生において一番真面目になった時である。自己及び人生の偽らざる真相にさめ、真実中の真実が胸にせまり、捨つべき一切を捨て、滅ぶべきすべてを滅ぼして、その本然の相に立ちかえった世界において開けるものが即ち信心である。

自力我慢がものを言っている世界では、受け取らねばならぬ忠言も教えも、すべてはねかえして、顛倒妄想の我をおしきつて、あやまれる自己をどこまでも実現してゆこうとする。でないものは、あの声、この声、四方八方の声を聞入れて、すべてからお褒めを頂こうとするが故に、名利の為の七面鳥となつて、人生から抽象的になつて、生ききつた香いをかぐことが出来なくなる。

信心の世界はそのいづれをも出された世界である。

「蓮如上人仰せられ候。『一向に不信の由申さるゝ人は、よく候。言葉には安心の通り申し候うて、口には同じ如くにて紛れて空しくなるべき人を悲しく覚え候ふ由』仰せられ候ふなり。」(御一代聞書)

「慶聞坊のいはれ候。『信は無くて紛れ回ると日にく、地獄がちかくなる、紛れ回るがあらはれば地獄が近くなるなり。』『うち見は信不信見えず候。遠くいのちを持たずして今日ばかりと思へ。』と古き志の人申され候。」(同上)

悲しいことながら、この御言葉の真実であることを見せつけられることである。これこそ真実の信心に最も遠いことである。青年の人や一向不信の人は、心に納得の行くまでは手も合せない。御名も称えない。しかるに、口には御名を称え手には数珠を持ち、如何にも殊勝そうに見えておつて、今日一日を紛まぎれてゆく人が一番困つた人である。それが更に劫を経ると、人前だけの仏法者となり、心の胸奥には久遠劫来の癌

があり、濃血が一ばい充満しているのに、表だけを包んでゆく哀れな存在となるのである。

## 信心の世界

間違える人は、信心の世界において人間の第一義の問題を捨てることだと思う。信心の世界は第一義の問題を捨てるのでなくて受け取るのである。安価なる一朝の感激に第一義の問題を葬ってしまうことではなくて、永遠に第一義の問題において生きさせて頂くことである。宗教の世界の真实性がそこにある。人生の問題をよそに見ず、己の問題をごまかさず、おめず臆せず、我が真相に直面しつつ、真実の教えを聞くままに開けて来る世界に帰入してゆくのである。

「誰の輩も『我はわろき』と思う者一人としてもあるべからず、これしかしながら聖人の御罰を蒙りたるすがたなり。これによりて一人づつも心中を翻さずば、永き世泥犁ないりに深く沈むべきものなり。是といふも何事ぞなれば、真実に仏法の底を知らざる故なり。」(同上)

心中を翻すことはただ真実の教えの徹底によるのである。真実教によらずしてどうして「真実に仏法の底」が知られよう。「我はわろき」と思わぬのも、教えのメス徹底せずして、胸底深く隠れたる自力我慢の心が砕けつくさないためである。心の底を打ぬかれて、久遠の大海水に通ずるのでなければ、自然法爾の念仏の噴水が湧き出づることは出来ないのである。地獄、餓鬼、畜生を超え、善趣門を開いて頂くためにせつかく教法の園に入りつつ、大信成就せぬことは悲しむべきことである。

「一。『皆人のまことの信は更になし、ものしりがほの風情にてこそ』近松殿の堺へ御下向のとき長押におしておかれ候。『後にてこの意を想ひ出し候へ』と御掟なり。光應寺殿の御不審なり。『ものしり顔』とは『我は心得たり』と思うがこの心なり。」(同上)

念仏生活にして、如来本願の真実と相応せざれば、必ず名利と相応す。名利と相応すれば、往生の大道を失い、雑毒海に漂没して、無上菩提の道はもちろんのこと、真実の人となる道もまた止まってしまふであろう。自覚を通して深山の杉のごとくあれ。第一義の問題に終始して、永遠の聞法求道者たれ。「得たりと思うは得ざるなり。」と。